

介護の「ありのまま」を キヤッチボール

●月刊「ほいづん」編集発行人
伊藤美代子さん



「ほいづん」とは？

本の名前の「ほいづん」って何のことと聞かれたところから話が進んでいくよと彼女の目が輝く。「ドイツ語で美しい女って言うの」と私達を煙に巻きながら、自分はまだごんないで優しい感じでありきたりな名前や、横文字が嫌い。そこで思いついたのが、人間をとると固有名詞がなかなか思い出せなくなった時に使われる代名詞の「あれ」、山形弁では「ほれほれ」「ほいづよ、ほいづ」とも、そこで、ほいづに「ん」をつけて「ほいづん」と名付けたのと茶目っ気たっぷりに笑う。

方言が消えつつある昨今、山形弁を堂々と本の名前にするところが嬉しい。

その上本の名前のきっかけにもなり、誰も彼もが逃れられない「人間をとる」ことをテーマに取り上げているところが「ほいづん」の醍醐味であろう。

何もかも一人で

40年以上発行された「婦人やまがた」に27年間携わったが、2000年に休刊になって失業した時、これからは先も自分は書き続けていこうと決断して独り立ちしたものの、独立の資金に予定していた失業保険が入らず最初からマイナスのスタート(2倍の損失)という棘の道。

そんな中、友人がキャビネットや机を提供してくれたおかげで取材、執筆、営業と何もかも伊藤さん一人でやりこなし、介護をテーマとした月刊「ほいづん」が発行のはじまりとなった。綱渡りのような振り出しと心配したものの折り返しも介護保険法がス

タートしたこともあり関心を抱いた方達からの電話やFAXが数多く寄せられ大変な反響だったとのこと。

なぜ、介護がテーマなのか？

今日、ようやく介護の話題が普通に取り上げられるようになってきた。以前は某市長が要介護の妻のため市長職を辞したことが美談として取り上げられたことがあったが、妻や娘が夫や親のために職を辞したとして取り上げられたらどうか。介護は女性がするもの、やって当然という考えが社会の根底にあった。そのしがらみを断ち切るべく彼女達は行

動(電話・FAX)を開始した。夫は男)というあくらの上で何もしない。この実体を取り上げて欲しいと。

切実な女性の叫びが伝わり、関心が高まり今日に至っているということだ。

60キロの米を女性一人で持ち上げるのは到底無理。二人で協力しあつたら軽く持ち上げられるでしょ。そのところを男性にも理解してほしいと厳しい言葉。

2000年に介護を取上げた時、当時は介護に無関係でいられた人が5年経ったら介護する立場になっていった。誰にでも降りかかる大きな問題。女性だけの、男性だけの問題では決してない。

書くことの意味

雑誌の編集に携わった以外、何の職も経験していなかったため、独立したものの必死でがんばって取り組んでいるという伊藤さん。介護保険法

がスタートした頃から県内の全市町村44カ所(合併前)全てを「婦人やまがた」時代に2巡、独立して1巡して実態を把握するほどの熱の入れかた。

しかし、大変な中にも、一人でやっているからこそ自分むき出しの紙面作りが出来るというもの。「ほいづん」が必要とされて数々の情報が寄せられてきて取材も楽しくなったが、難しい問題にも出会い、詫言状を提出させられたりもしたという。書くに当たって嘘は書けない。文章は残る。

即読者からの反応が寄せられる。「良かった」とも、「悪かった」とも。

「ほいづん」は介護だけではなく、健康問題、食品の紹介、男と女の付き合い、数々の団体の紹介、イベントの紹介と多岐に渡り、自ずと山形の表情が伝わってくるのが嬉しい。

一歩踏み込んだお節介

伊藤さんは昨年母親を亡くした。仕事を続けながらの介護は大変だった。それでも彼女は「私は時間の配分が自由に出来たから介護ができた。勤めを持っている人はどれほど大変か…男性も女性も」と。

そして、親の介護を経験して次の

ようなアドバイスを残してくれた。

「困ったことがあったら、いつでも言ってみて」と軽い言葉かけは出来ても、言われた方にとっては、なかなかそれには応じられなくなっている。「困った」と言うのは勇気のいることなのではないか。そこで独居老人の孤独死と言ふ悲しい出来事も起きてくるのかも…。いま、老老介護とまでいわれている。その人達にもう一歩踏み込んだ、具体的な行動を起こしてあげることが必要なのでは…と。



そして、こんな具体的な話をしてくれた。

同じマンションに住む90歳のおばあちゃんが、吹きさらしの階段を降りて生ゴミを出そうとしていた。今度私が出してあげるからここに電話してとメモを渡したが、いつまで待ってもこなかった。そこで一歩踏み出して訪問したところ気安く応じてくれ

その後電話がくるようになった。

一歩踏み出した行動のお陰でおばあちゃんには、どんなにか嬉しかっただろう。

「ほいづん」を交流の場に

生まれ育ったところに事務所を開いた伊藤さんの所には、顔なじみの方が訪ねて来てくれ、楽しい交流が

繰り返り広げられているとのこと。

そんなことから自分の持っているはずかすの情報を還元してあげて高齢者とのコミュニケーションをはかっていきたいとも。

仕事を通して、また、仕事から得られた経験で地域にとけ込み重要なポジションにおられるのを感じる。正にキヤッチボールだ。

昨年、蔵王地区の社会福祉協力員に押し入れ50軒を担当する事に。社会福祉協力が長く地域の人の交流があまりなかったため最初は躊躇したものの、案ずるよりは産むがやすかったです。

多くの方との新たな交流が生まれ、地区の高齢者の状況が少しずつ分かってきた。

福祉に關しての専門用語などはまだあったが、失業保険受給中に介護員(ホームヘルパー)養成研修2級課程を受講していたおかげで多方面から取り組みができてきた。

すぐ近くに住んでいる人と分かっている、なかなか声掛けが出来なかった、手押し車を押して歩く80歳を超えた老婦人に、一歩踏み出した行動を心がけたところ、わざわざ自宅を訪ねてこれお礼の言葉を受け

た。こうして地区の高齢者との交流が生まれ社会福祉協力員として歩みつつあることに自分自身が安堵したところ。

こうしてみると、少しずつ地域の一人として成長してきたのかなと感じる。ただ、個人を尊重する事も忘れてはならない。深入りはせず、しっかりと心配りをするだけ。自立支援のモットーがそこにある。

社会福祉協力員は、ほとんどの場合女性が選出されている。暖かい言葉遣いで真剣に取り組みをされているのを見かけると女性のパワーの大きさを感ずる。と同時に、人生の辛さを体験されてこられたであろう男性の方々の、地域のリーダーとして福祉に取り組み姿には頼もしさを感じる。その後ろには嬉しいことに山形市より委託を受けている地域包括支援センターが存在し数多くの相談事に応じてくれている。

介護は誰かが保って行かなくてはならないこと。背中をむけてはいけないと痛感。(編集協力員記)



市内にある伊藤美代子さん(今年・年女)の事務所の看板「月刊ほいづん」を通学途中の子も道が見上げて「ほいづん(?)」と訝しげに読み上げるという。

*取材を終えて